

ピリピ人への手紙2章12-13節 「あなたの内に働く神」

1A 従順な生活 12

1B キリストの模範

1C 良い働きを始められた方

2C 内から外へ流れる御霊

2B 救いの達成

1C キリストの現れ

2C 自分自身の救い

3C 神に対する畏敬

2A 事を行う神 13

1B みこころのまま

2B 志と行い

本文

ピリピ人への手紙2章を開いてください。私たちは、年末の礼拝でピリピ2章の前半、11節まで見てきました。今日は後半部分、12節以降を午後礼拝で一節ずつ見ていきます。今朝はその始めの12-13節に注目します。「¹² こういうわけですから、愛する者たち、あなたがたがいつも従順であったように、私がつもにいますときだけでなく、私がない今はなおさら従順になり、恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい。¹³ 神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」

1A 従順な生活 12

1B キリストの模範

「こういうわけですから」という言葉から始めていますから、これはその前のことを指しています。それは、年末の礼拝、クリスマスの礼拝で見てきたことですね。私たちが、キリストの思いを抱きなさいということ。そのキリストの思いとは、へりくだることでした。神の御姿であるにも関わらず、そのあり方を捨てられないとは思わないで、しもべの姿を取り、人間と同じようになられました。そして、自ら低くして、十字架の死にまで従われたのです。こういうわけですから、いつも従順になって、救いを達成するようにしなさい、というのが、ここでの流れです。イエス様のこの姿に倣いなさいという意味になります。

このまま聞いていると、私たちはこう思ってしまうんですね、「無理だ・・・」。模範という言葉を書く時に、私たちはもちろん、そのようでありたいと願います。けれども、その模範の基準が高ければそれだけ、自分には到達できないと感じます。ましてや、イエス様ご自身が模範であるならば、自

分にはそんな力はありませんと告白するだけです。

英語圏のキリスト者の中で流行っている言葉がありますが、WWJD というものです。What Would Jesus Do?という言葉の頭文字を取ったもので、「イエス様だったら、どうするの?」と問いかけているものです。プレスレットにプリントされているものを身に着けていたりしています。なんとこの W.W.J.D.が、日本にもやって来ているらしく、ある俳優さんが、お守り代わりに身に着けているという記事を見つけました。¹

イエス様だったら、どうするのか?という問いかけは、とても良いことです。一度、立ち止まってよく考えるのには良い呼びかけです。けれども、私ははっきり覚えています、「そんなこと、できっこない」という圧力がかかりました。イエス様と自分では、あまりにも大きな開きがある。だから、この方のように行っていきなさいと言われても、出来ない自分がいる、と思っていました。そして、パウロやペテロ、ヨハネなど、人間の器を見ても、イエス様ほどではないですけれども、「いや～、自分には無理だ」とってしまうわけです。

1C 良い働きを始められた方

今朝の学びは、このギャップを埋めるためのものだと思ってください。実は、そういった見方をするために、パウロが、「**こういうわけですから**」と言ったのではないということです。ここの箇所は、12 節と 13 節を一つに読む必要があります。12 節は、自分の救いを達成しなさいと命じられているのですが、13 節にそのままつながっているのです。「神が、あなたがたのうちに働いて」いるということです。ギリシア語には、13 節の始めに「**というのは**」という接続詞が付いています。「自分の救いを達成しなさい。というのは、神が事をあなたがたのうちで行われているから。」という流れになっています。

ですから、内に神がすでに働いておられるので、その働きに従順でありなさい。神ご自身が、すでに良い働きを始めておられるのですから、その内で働いておられる方に従順になって、神があなたを通してご自分のことを行わせるようにしなさい、ということです。自分が自分の力や知恵で頑張るのではなく、むしろ、自分の力と知恵を退いて、神の御力と知恵に拠り頼んで、従うようにしなさい、ということなのです。

ピリピ人への手紙の冒頭で、パウロが彼らを励ました言葉を思い出してください。「1:6 **あなたがたの間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています。**」神が、良い働きを始められて、それを完成してくださると確信しているのです。ここでは具体的に、彼らがパウロに何度となく、福音宣教の働きのために贈り物をしていたことが、良い働きであります。そのような強い願いがあつて、それを実行したけれども、それを始

¹ <http://www.shinya-niuro.jp/route216/goods/wwjd.html>

めたのは神ご自身なのだよ、ということです。キリストという空におられるような高いところに向かって、私たちが飛び上がるような話ではないのです。

パウロのキリストへの思いというのは、何か遠くから語りかけられて、それに自分だけで従おうとするものではありません。「ガラ 2:20 キリストが私のうちに生きておられるのです。」キリストが、私たちの内におられるのです。これが驚くべきことなのです。パウロは、他の箇所では、「Ⅱコリ 4:7 私たちは、この宝を土の器の中に入れてあります。」土の器にしか過ぎない私たちに、宝であるキリストがおられる、ということです。ここが、神の神秘、神の奥義であります。全く不完全な者に、完全な神の働きがある、ということです。コロサイ人への手紙でも、「1:27 あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」と語っています。

しばしば、キリスト者の中で、「キリストは完全だけれども、キリスト者は過ちだらけだ。だから、教会には来ない。」というような立場を取る人々がいます。これは、この神の奥義をまだ理解していないからに他なりません。キリストのように生きるとは、その人が超人化することではありません。欠けがいっぱいある中でも、それでもその人にキリストが働かれて、それでその人にキリストを見ることができる、というものです。パウロが、「私に倣う者でありなさい。」と勧めている言葉があります。しかし、パウロがキリストのように完璧になったから、そう語っているわけではありません。「Ⅰコリ 11:1 私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。」と語っているのです。パウロがキリストに倣っている、その姿を見て、あなたもキリストに倣っていきなさいということでもあります。もし、パウロが超人化して、人から神のようになったのであれば、キリストではなく、パウロ自身があがめられるようになりますね！

実は、イエスご自身も同じようなそしりを受けておられました。神であられ、罪なき方であっても、人として生きておられて、この方が父なる神と一つだという証しを立てているのに、欠けに見えるようなことで、人々は批評していたのです。「ヨハ 7:24 うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい。」とイエス様は言われました。イエス様は、ガリラヤのナザレのヨセフとマリアのところで育ちました。ナザレから出た者ということで、見下されていました。また、処女マリアから生まれましたが、私生児ではないのか、あの者はサマリア人だとも言われました。そして、安息日についての解釈にイエス様は反したことを行われたので、モーセの律法を破る者と呼ばれました。イエス様という人を見ていけば、そこには欠けのようなものがたくさんあったのです。けれども、イエス様の行われていることは、みな、この方に父なる神がおられて、その方が現れるためでありました。父なる神と一つであることを、イエス様は証しされたのであって、ご自身が神から離れてすぐれていることを見せるためではなかったのです。

イエス様は言われました、「ヨハ 5:43 わたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を

受け入れます。」キリスト者を見ていく中で、その人におられるキリストを見ていくのではなく、その人自身を見て批判する人は、まさにこの過ちに陥っています。その人をあがめることが目標になっています。自分自身にも、自分がキリストのようになることを、良い人になることを演じるし、また他の人たちにもそれを強要するのです。それは父なる神の名ではなく、互いに榮譽を受けようとしていたユダヤ人の指導者たちの姿と同じなのです。

2C 内から外へ流れる御霊

キリスト者は、キリストという基準に達するべき向上しようとし、けれども失敗するような存在ではありません。ヨーヨー・クリスチャンという言葉がありますが、ある時は調子よかった、けれども失敗して調子悪い、というような、上に下に動く存在ではないのです。むしろ、「内におられて、外に出していく」存在です、上下(up&dow)ではなく、内外(in&out)です。内におられるキリストが外に現れる存在なのです。キリストが何か高いところにおられてその基準に達するのではなく、すでに私たちの内に、この低いところにいる自分の内におられて、そして自分がこの方に従順になることによって、外に現れてくださる方なのです。

イエス様は、もうひとりの助け主である御霊を私たちにくださいました。その御霊のことを語られる時に、あふれ流れる水として語られました。「ヨハ 7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」この、「流れ出る」というのは、「鉄砲水のように溢れ流れる」という意味です。荒野で川が流れるという、預言がありますが、荒野での川は鉄砲水です。いつもは涸れ川ですが、一年に一回、二回、雨が降ります。その時は、少しずつ流れるのではなく、一気に水が流れるのです。この方を信じる、信頼して生きる時に、主がこの働きを内から外に行ってくださいます。

2B 救いの達成

ですから、従順とは何か？と言いますと、「自分の思いとは異なる思いが、神から与えられている。自分が普通では思いつきもしないことを、神は思いや願いの中で起こされる。それに対して、子が父の言いつけに従うように、「はい、わかりました」と言って従う」ということになります。自分で頑張っ、完璧になろうとするのではなく、むしろ不完全な自分がいて、それでも完全な方が内で働かれて、自分の思いや心に、ご自身の思いを置かれるのです。それを、そのまま行っていくという信仰が必要なのです。今、自分の見ているものが、なえた右手であっても、それを動かさないと命じられて、そのまま言われるとおりにしたら、動いたというような感覚です。自分には、全くできないと分かっています。けれども、主が言われるのだから、この方を信頼してそれを行おうとすると、主ご自身が行うことのできる力をその時に下さるのです。このようにして、内におられる方が、私たちの従順を通して、外に働いてくださいます。

それが、「**自分の救いを達成する**」ということなのです。これは、救われるために自分が行いに努める

ということではありません。既に救われており、神が良い行いを用意しておられます。私たちは神の作品にすでになっているのです。この方がなされることに、自分を従わせて、神の救いが明らかにされていく、実現されていくということです。

1C キリストの現れ

このことについて、パウロがすでにピリピ 1 章で述べていました。「1:20 生きるにしても死ぬにしても、私の身によってキリストがあがめられることです。」このようにして、キリストがあがめられること、キリストが自分の身によって現れてくださることを彼は願いました。神の救いとは、キリストの姿が現れることですね。神の御姿であるキリストが明らかにされることです。その救いを達成しなさいと主は命じておられます。

私たちは、それで従順をしっかり学ぶことが必要です。主のくださった新しいご性質があります。この方に聞き、そして従っていくことに努める必要があります。ちょうど肉体の鍛錬があるように、霊の鍛錬があります。ペテロは、第二の手紙で、私たちが、この世の腐敗を免れ、神のご性質にあずかる者となったと言っています(1:4)。すでに神のご性質が与えられているのだから、だったら何もなくていいのか？ではないのです。私たちの内にこの働きをしてくださったのですから、私たちの内で、そのことをしっかり受け止めて行かないといけない。それが鍛錬です。続けて、こう話しています。「1:5-8 だからこそ、あなたがたはあらゆる熱意を傾けて、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、私たちの主イエス・キリストを知る点で、あなたがたが役に立たない者とか実を結ばない者になることはありません。」

2C 自分自身の救い

ところで、他に大事な点があります。「**自分の救い**」と言っていることです。これはギリシア語でも、あなた方自身の、というように強調されています。他の人たちの救いではなく、自分自身の救いです。私たちはとかく、他の人たちを見回してしまいます。そして、自分自身に対する神のご計画があることを忘れてしまいます。いつも、イエス様を見上げる必要がありますね。周りを見回すのではなくて、他の人がしていることは、その人がイエス様に従っていることでもあります。自分には自分がイエス様に従う道があるのです。

とても良い話が、ある注解書に載っていました。あるクリスチャン家庭の話です。彼女は、両親に愛されて育ちました。お母さんが看護師だったので、自分も看護師になりたいと思いました。大学に通うことになりましたが、彼女はとても心が辛くなりました。それを学校休みで家に戻って来た時に、夕食の後について心を明かすことにしたのです。

「お母さん、そしてお父さん。言わなければいけないことがあって、でも傷つけてしまうんじゃない

いかと。「そんなことないよ、心にあることを言いなさい。お父さんもお母さんも、そのことをいっしょにお祈りしたいし。」「高校生だった時に、看護師になりたいって、言ったでしょ？それは、お母さんが看護師だし、私もその道に進んでくれることをお母さんが願っているのではないかって思ってたの。でも、これ以上が前に進めなくて。主は、看護師になるように願っておられないのではないかと思う。」お母さんは微笑んで、娘の手を取って言いました。「お父さんも私も、あなたに、みこころが成ることを願っているわよ。もし他のことをしたら、それこそ残念だわ。」

親の願っていることをかなえることが信仰だと思っていたところから、自分自身の信仰で、神のみこころを行おうとしているのです。これが、自分の救いを達成するべく努めることだという注釈です。²全く同意です。

3C 神に対する畏敬

もう一つ大事なことがあります。「**恐れおののいて**」というところです。これは、パウロが今、ローマの牢にいます。彼らと共にいません。けれども、いなくとも、いや、いないからこそ、ますます従順になってくださいとお願いしています。その時に必要なのが、「**恐れおののく**」ということです。これは、主とそのみことばに対して、真剣にそれを聞き、健全な恐れを抱き、主に従うことです。イザヤが預言しました、「66:2b わたしが目を留める者、それは、貧しい者、霊の砕かれた者、わたしのことばにおののく者だ。」ハガイ書には、ハガイが主からの警告の言葉を、帰還したユダヤ人たちに語りました。神殿を建てるのをやめて、自分自身の生活を求めていたからです。ハガイが預言した後に、こうあります。「1:12 彼らの神、主の御声と、ハガイのことばに聞き従った。民は主の前で恐れた。」それで、宮の建築に再びとりかかります。

私たちは、どうしても、誰かがいると、しっかりと主の声を聞いても、そうした監督がないと、「ああ、見ていないから」といって、聞かないということがありますね。仕事で上司がいればしっかり動くのに、いなければ手を抜くというように。それが教会でも起こります。しかし、そうではなく、いないときはなおさらのこと、主のみこころを行うよう努めるのです。その時に必要なのは、主がここにおられて、見ておられるのだという、健全な恐れです。

2A 事を行う神 13

そして、パウロは「**13 神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。**」とっています。

1B みこころのまま

「**みこころのままに**」というのは、神の悦びにしたがって、とも訳すことができます。漢字は快樂の悦びのほうです。満足して喜ぶ、という意味合いです。神がご自分の悦ばれるままに、事を行われ

² Wiersbe, W. W. (1996). The Bible exposition commentary (Vol. 2, p. 77). Victor Books.

ます。ですから、私たちが自分で制御できるようなものではないことを知ることが大事です。御霊が働かれる時、みこころのままに働かれ、賜物を与えられます。「I コリ 12:11 御霊は、みこころのままに、一人ひとりそれぞれに賜物を分け与えてくださるのです。」

私たちは、自分で自分の生活を管理しています。けれども、主はその私たちのやり方に介入されます。そうすると、自分が自分でやっていることができなくなります。それを恐れて、御霊の語られていることを押しつぶしてしまうのです。これを、「御霊を消す」と言います。「I テサ 5:19-20 御霊を消してはいけません。預言を軽んじてはいけません。」主が何かを語られているのに、自分の守備範囲を超えているので、心の中で拒んでしまうのです。しかし、御霊に心を明け渡し、御霊に導かれていくのです。

2B 志と行い

そして、「志を立てさせ、事を行わせ」とあります。初めに、志なのです。私たちキリスト者には、不思議なことが起こります。今まで思っていなかったことを、願うようになります。そして葛藤するのです。主がこのように語られているかもしれない、けれども、どうすればいいのだろう？というようにです。けれども、この葛藤こそがすばらしいのです。主のみこころを行おうとする願いがある時、それはすばらしいことです。

そして、主のみこころを行う時に、私たちは喜んで行うことができます。なぜなら、初めに主がそれを行いたいという願いをくださるからです。行う時はすでに、それを願ったうえで行っています。ですから、疑ったり、不満を言ったりしている時は、すでにみこころから外れていると言ってよいでしょう。

最後に、「事を行わせ」ということです。志だけでなく、実行します。従順とは、行っていることによってその真価が試されます。知識を得ただけで、行っていないければ、それは神のみこころを行っているとは言えません。語っている多さではなく、行っているかそうでないかで、その人の歩みが御心の中にあるかどうかを見分けるべきですね。語っている人が大きな声を持つのが、世の中です。けれども、行っている人々は、大きな声を持たず、ちょうど、イエス様が葦を折ることなく、人々を助けられたように、声は小さくても、わざが着実に広がっていきます。

私たちは、このようにして、神の救いが達成されることを、私たちの間で見たいですね。神の救いとは、天国に行ける、地獄に行ってしまうというだけの話ではありません。たった今、私たちの間で、良いわざが行われているそのものが、救いが進んでいることなのです。私たちが、仲間からちょっと一歩離れて、歩むのが信仰生活、教会生活ではありません。自分自身は当事者なのだ、自分たちの間におられるキリストが、神の奥義なのだということを知ってください。